

## 手縫いにおける縫い目の機能的・外観的評価（第2報）

相模女大家政 永井房子 ○田中百子 聖徳大 三石幸夫

目的 縫い目形成の一つである手縫いにおける並縫いは、布を縫合するところに広く用いられる技法である。その縫い目の大きさは、従来、経験的に綿織物には比較的大きい縫い目、絹織物には小さい縫い目で縫合するのが好ましく、その目安は、前者では4mm前後、後者では2～3mmがよいといわれている。縫い目の大きさの設定について、演者らは、縫い目の機能および外観の両面より検討することを目的として、前報では、機能的評価として機械的機能に観点をあてて検討し、報告した。今回は、縫合後の外観特性に焦点をあてて評価を行うこととし、和服縫製専門家による並縫い後の縫合布の外観について種々官能検査を実施し、縫い目の大きさの評価を行なった。

方法 試料布は綿織物1種、絹織物3種、計4種の和服地。試料糸はカタン糸1種、絹糸2種、ポリエステル糸1種、計4種。縫い目の大きさは3.8cm間に6、10、14、18目の4種。これらを組合わせて和服縫製専門家3名により、20cm間並縫いを行い、種々の官能検査を実施した。第1は、作業性の面から縫製者自身による①縫い目の大きさ②布と糸のなじみ具合の2項目5段階尺度評価、第2は外観上から和服縫製専門家8名による(a)2項目5段階尺度評価、(b)2項目の好ましさを検討する順位法等である。結果 1および2(a)の結果では、縫い目の大きさ10目の場合の評価が最も高く、18目の評価が最も低い。(b)の結果では、ケンドルの一致性の係数 $w$ には高度の一致性が認められた。また、スピアマンの順位相関係数 $r_s$ を求めた結果、縫い目の大きさと、布と糸のなじみ具合の順位には相関があることがわかった。